

# 『寓意オウィディウス』における『ピラムス<sup>1</sup>とティスベ』

ピラムスの死の動機と寓意的意味

村山 いくみ

はじめに

古代ローマの詩人オウィディウスによる古代神話集成『変身物語』の第4書には、なぜ桑の実の色は白から黒へ変化するのかということが、ピュラモスとティスベという若者たちの悲恋の物語によって説明されている。1150年から1170年の間に書かれたとされる作者不詳の『ピラムスとティスベ』は、この古代神話の一挿話を題材にとった、8音綴平韻によるフランス語の詩作品であり、フランス文学史上のいわゆる「古代物語」と「オウィディウスもの」に位置づけられている。この題材自体は、聖堂付属学校でのレトリック教育における作文のテーマにも好んで選ばれ<sup>2</sup>、12世紀後半以降、非常に良く知られていたが<sup>3</sup>、中でもとりわけこの『ピラムスとティスベ』が中世以降も流布し続けたのは、この作品が14世紀前半に『寓意オウィディウス』の中に取り込まれて以降、この書物の伝統の中で散文化され、印刷され、16世紀後半まで継承されたからである。

---

<sup>1</sup> 登場人物名ピュラモスは、現代フランス語の綴りでは *Pyrame* となり、日本語では「ピラム」と音写すべきだが、本稿では対象とする12世紀から15世紀の写本および16世紀までの印刷本で記される *Py[i]ramus* の綴りに従って、以下「ピラムス」と記す。

<sup>2</sup> マチュー・ド・ヴァンドームやジェルヴ・ド・メルクレーによるラテン語詩が残されている。Robert Glendinning, «Pyramus and Thisbe in the Medieval Classroom», in *Speculum*, n°61/1, 1986, pp. 51-78. また、聖堂付属学校に通う思春期の生徒に対する、性に関する一種の道徳教育の役割を担っていた可能性も指摘されている。Christopher Lucken, «Le suicide des amants et l'enseignement des lettres. *Pyramus et Tisbé* ou les métamorphoses de l'amour», in *Romania*, t. 117, n° 467-468, 1999, pp. 363-395.

<sup>3</sup> 多くの作品中で言及され、また素材として用いられている。例えば、クレティアン・ド・トロワの『エレック』、『イヴァン』、『ランスロ』、また『オーカッサンとニコレット』、クリスティヌ・ド・ピザンの『婦女の都』、ボッカチオの『名婦伝』、ジェフリー・チョーサーの『善女物語』、ジョン・ガワールの『恋する者の告白』等。中世以降ではジャン=アントワーヌ・バイフやテオフィル・ド・ヴィオーが挙げられるが、最も有名なものはやはりシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』である。

『ピラムスとティスベ』の後半部には、ピラムスが恋人の死を誤信し、自ら命を絶つ場面があるが、この時ピラムスによって独自される自死の動機を『寓意オウィディウス』の韻文版と散文版はそれぞれ異なって伝えている。本論ではこの相違がなぜもたらされたのかという問題を取り上げる。そのためにはこの物語の伝承を遡る必要があるため、まずは12世紀の『ピラムスとティスベ』に見られる文学的特徴を概観した後、この12世紀の作品を14世紀初頭の『寓意オウィディウス』の作者がどのような意図で自らの作品に取り込み、解釈を施したのかを詳しく見てゆき、次いでそれを15世紀の散文版と比較することによって、問題の一節がどのような意図で改変されたのかを考察する。

### 物語のあらすじ

昔バビロンの町にピラムスという名の美青年とティスベという名の美しい娘がいた。ふたりは幼馴染で、壁一枚に仕切られた隣り合う家屋に住んでいたが、成長するとともに深く恋い慕うようになる。しかし親同士の不仲によってその恋を禁じられたふたりは、ある日壁に小さな裂け目を見つけ、その穴を通じてどうにか心を通わせるが、ついに駆け落ちを企て、ある晩に町はずれの、桑の木が生える泉で落ち合う約束をする。先に到着したティスベは野生の獅子に遭遇し、必死で逃げ隠れたが、その途中でベールを落とす。獲物を捕らえたばかりの獅子は血塗られたその口でそのベールを引き裂き、去っていった。後から来たピラムスは、そのベールを見つけ、彼女が獣に喰われて死んだと思い込み、自ら腹を刺して自殺する。嘔き出たその血が傍らの白い桑の実を黒く染める。戻ってきたティスベは自分のベールに口づけをしながら息絶える恋人を発見し、自らも命を絶つ。双方の親はふたりをひとつの墓に埋葬して話は終わる。

### 12世紀の『ピラムスとティスベ』

#### 写本と成立年代

『ピラムスとティスベ』は13世紀後半の写本4点<sup>4</sup>、そして『寓意オウィディウス』の写本群<sup>5</sup>によって今日伝えられている。『寓意オウィディウス』

---

<sup>4</sup> フランス国立図書館 fr. 837、fr. 19152、nouvelles acquisitions fr. 5094、およびベルリン州立図書館 Ham. 257。

写本の中で今日最古とされるルーアン県立図書館所蔵O.4写本は14世紀初頭に制作されたと考えられており、前述の4点よりも時代が後であるが、掲載するテキストとしては遺漏や誤謬が最も少ないため、20世紀以降刊行されたすべての校訂版の底本とされている<sup>6</sup>。

写本はいずれも13世紀以降に由来するものではあるが、デ・ボーアは音韻論、語形論、文構造から12世紀のノルマンディー方言の特徴があることを指摘し、また、古代の神話や英雄の物語をフランス語に翻案する、いわゆる「古代物語」といわれる文学的潮流が、1165年のブノワ・ド・サントモールの『トロイア物語』を最後に、クレティアン・ド・トロワやマリ・ド・フランスに代表される「ブルターニュもの」へと転向することを説明したうえで、オウィディウスの古代神話の物語をモチーフとする当該作品が1150年からおよそ1170年の間に成立したと推定する<sup>7</sup>。

### 物語と詩の形式

『変身物語』に含まれる「ピュラムスとティスベ」は長短短6韻脚による110行ほどの短い逸話である。ラテン語詩の1行はフランス語の8音綴平韻への変換で約2倍の分量になるとされるが、12世紀の『ピラムスとティスベ』がそれよりも遥かに長い、約900行にまで膨張しているのは、作者がレトリックの技法を巧みに用いてこの古代の物語を増幅させたからである。登場人物の心情はより複雑かつ詳細に描写されている。例えば、駆け落ちの前日に膨らむふたりの期待と、当日、約束の場所へと出発するティスベの様子は『変

---

<sup>5</sup> 新しい校訂版の第1巻が2018年秋に刊行された。Ovide moralisé, éd. par Craig Baker, Marianne Besseyre, Mattia Cavagna, Stefania Cerrito, Olivier Collet, Massimiliano Gaggero, Yan Greub, Jean-Baptiste Guillaumin, Marylène Possamaï-Pérez, Véronique Rouchon Mouilleron, Irene Salvo, Thomas Städtler et Richard Trachsler, Société Des Anciens Textes Français, t. 1, 2018. 第2巻以降の有効な校訂版は現段階では依然として *Ovide moralisé, poème du commencement du quatorzième siècle, publié d'après tous les manuscrits connus*, éd. par Cornelis de Boer, Martina G. de Boer et Jeannette Th. M. Van 't Sant, Amsterdam, Müller / Noord-Hollandische Uitgevers-Maatschappij, 1915-1938.

<sup>6</sup> *Piramus et Tisbé, poème du XIIIe siècle*, éd. par Cornelis de Boer, Champion (CFMA), 26, 1921; *Piramus et Tisbé*, a cura di Francesco Branciforti, Firenze, Olschki, 1959; *Three Ovidian Tales of Love*, ed. and trans. by Raymond Cormier, New York, Garland, 1986; *Pyrame et Thisbé, Narcisse, Philomena. Trois contes français du XIIIe siècle présentés*, éd. et trad. par Emmanuèle Baumgartner, Gallimard, 2000; *Piramus et Tisbé*, ed. and trans. by Penny Eley, Liverpool, University of Liverpool, 2001; *Piramo e Tisbe*, a cura di Cristina Noacco, Roma, Carocci, 2005.

<sup>7</sup> De Boer, *Piramus et Tisbé, op. cit.*, pp. IV-XII.

身物語』ではわずか4行で説明されるのに対し<sup>8</sup>、12世紀の作者は、恋人たちに期待だけでなく、そこに、愛の成就への期待に対抗する「良識」や「理性」を導入し、葛藤や躊躇といった心情を織り交ぜることによって、約50行に増幅させた<sup>9</sup>。

しかしそれ以上にこの作品を特徴づけるのは、作品全体の約半分の分量を占めるふたりのモノローグである。このモノローグには、直接会うことを禁じられたふたりの壁越しの会話も含まれ、そこでは恋人たちの恋慕の思いと禁じられた恋ゆえの嘆き、自問、愛についての問いかけがすべて直接話法で語られる。

ここで用いられる詩の形式は、一般的な8音綴平韻で表される叙述部分とは異なり、ひとつの詩節 *strophe* が大体3、4行で構成され（2行、あるいは5行の場合もある）、それら全ての行末で同一の韻が踏まれる。さらに冒頭一行目にまず2音節の短い句が置かれ、次行以降8音節の行が続く。例えば、次の様な具合である。

Hé, murs,  
Tant par estes espés et durs!  
Mes se je fuïsse auques seürs,  
La frete  
Fust a mes mains si ample fete  
Que sans veüe de la guete  
Vous en eüsses par mi trete.<sup>10</sup>

（「ああ壁よ、なんてあなたは分厚く堅いのだろう！ 私にもう少し自信があれば、その裂け目を、私の両手で広げられるのに。そうすれば見張り番に見られずに、あなた [= ティスベ] をそこから通り抜けさせるのに。」）

8音綴詩で3行以上の複数行にわたり同一の脚韻を持つことについては、ノルマンディーの古代詩には前例がないが、アングロ・ノルマンの詩では例外的ではなかったようである<sup>11</sup>。他方、冒頭一行目に置かれる2音節句につ

---

<sup>8</sup> Ovide, *Les Métamorphoses*, éd. et trad. par Georges Lafaye, Les Belles Lettres, 2007, t. 1, p. 99, vv. 91-94.

<sup>9</sup> 「しかし最後には愛が勝利した。良識も理性も [...] 思いとどまらせることができなかった」 De Boer, *Piramus et Tisbé*, *op. cit.*, pp. 18-21, vv. 593-637. 作者の用いたレトリックおよびオウィディウス注解書等のスルスの詳細は Branciforti, *Piramus et Tisbé*, *op. cit.*, pp. 8-65.

<sup>10</sup> De Boer, *op. cit.*, p.15, vv. 460-466.

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. VII.

いては、ゴットフリート版『トリスタンとイゾルデ』に類似する形式が含まれているとはいえ<sup>12</sup>、13世紀の写本<sup>13</sup>や『寓意オウィディウス』の15世紀の写本<sup>14</sup>では、この2音節句の欠落が特に前半部に散見されることから、一部の写字生にとっては不慣れな形式であったことが窺える。いずれにしても、語りや朗誦における一種の変形であるこの形式は、恋人たちの昂揚した悲喜交々の連鎖を効果的に伝える。12世紀の作者は、ふたりの恋人たちの相思相愛と互いの自殺という悲劇的な結末を音韻とリズムの響きからも強調させた、充実感のある文学性の高いロマンを完成させた。

#### 14世紀『寓意オウィディウス』による伝承

さて、この12世紀の『ピラムスとティスベ』は14世紀前半に『寓意オウィディウス』*Ovide moralisé*に借用される形で取り込まれ、それによって後世に広く普及した。1316年から1325年の間にフランス王フィリップ5世の妃ジャンヌ・ド・ブルゴーニュのために書かれたとされる『寓意オウィディウス』は、オウィディウスの『変身物語』全15巻すべてを初めてフランス語へ翻訳し、さらに各物語に対してキリスト教的な釈義を挿入した、8音綴平韻72,000行を超える長大な作品である。作者は不詳ながら、説教師や教育者を思わせる表現が釈義中に頻出するため、本作はもともとフランチェスコ会修道士が同僚の説教のために著したものと考えられている<sup>15</sup>。

全体として作者は『変身物語』を忠実に翻訳するが、箇所によっては他の書物の知識を援用して肉付けし<sup>16</sup>、あるいは既存の「オウィディウスもの」のフランス語作品をそのまま借用し、自らの作品に物語本文として挿入した。後者の例がクレティアン・ド・トロワの『フィロメーナ』、そしてこの『ピラムスとティスベ』である。

#### 『寓意オウィディウス』とキリスト教的真実

『変身物語』はそもそも多神教である古代異教の神話集成であり、三位一体を説くキリスト教徒は教義上相容れない。また猥雑な記述も多分に含むた

---

<sup>12</sup> Branciforti, *op. cit.*, pp. 4-7.

<sup>13</sup> ベルリン州立図書館 Ham. 257

<sup>14</sup> 特にフランス国立図書館 fr. 871、fr. 872、および大英図書館 Add. 10324。

<sup>15</sup> Marylène Possamai-Pérez, *L'Ovide moralisé, essai d'interprétation*, Champion, 2006, p. 873.

<sup>16</sup> 例えば、第12巻のトロイア戦争に関する箇所ではパエビウス・イタリークスの『イリアス・ラティーナ』を用いている。

めキリスト教徒にとっては不道德な作品といえるが、『寓意オウィディウス』の作者はこうした異教神話を「作り話」*fable*と捉え、その背後にはキリスト教的真実が隠されているという前提のもとに様々な解釈を付け加えることで、この異教の物語をキリスト教的に正当化した<sup>17</sup>。『ピラムスとティスベ』に対しても同じように、物語を語り始める際、「付け加えることなく、改変することなく、また何も取り除くことなく<sup>18</sup>」語り、そして「それからそこに真実を解き明かしましょう<sup>19</sup>」と述べる。

このキリスト教的真実は、聖書の言葉から4つの意味を汲み取ろうとする伝統的な聖書解釈の方法によって導かれる。この解釈法には様々な分類があるが、本稿ではストリュベルとポッサマイ=ペレに従い<sup>20</sup>、次の通り示すことにする。まず第1に、文字通りの意味を理解しようとする「字意義の意味」（出来事を過去に実際起きたこととして説明する「歴史の意味」、事象を自然科学の知識によって説明しようとする「自然科学の意味」がここに含まれる）である。次いで文字の背後にある別の意味を探る段階となり、すなわち第2の、信じるべき教義を示す「予型論の意味」、第3の、キリスト教徒として行うべき道德規範を示す「比喩の意味」、そして第4の、来たるべき終末を意味する「アナゴジックな意味（上昇の意味）」である。この後者3つまとめて称す場合には「寓意的意味」と呼び表すことにする。

それでは『寓意オウィディウス』の作者がこの物語から汲み取るべき意味をどのように説明したかを具体的に見てゆきたい。少々長いですが、後にピラムスの自害の動機をめぐる問題を解く鍵となる個所と思われるので、以下に解釈部分の全文を引用する。まずは第1の「字義の意味」から解かれる。

こういうわけで、真の歴史と一致するその物語が思い起させるように、その恋人ふたりは愛し合ったのであり、互いが互いのために命を絶って、彼らは引

---

<sup>17</sup> 「古代の物語をラテン語からフランス語へ訳することを、私の気に入るように始めよう —— またそれについて私の理解することも言うことになるだろう —— オウィディウスが与えた物語に従って。」*« Pour ce me plaist que je commans, Traire de latin en romans Les fables de l'ansien temps, S'en dirai ce que je entens, Selon ce qu'Ovides les baille. »*, De Boer, *Ovide moralisé, op. cit.*, t.1, p.61, vv. 15-19. 以下、引用文の下線は筆者による。詳しくは、村山いくみ「『寓意オウィディウス』写本の伝承過程にみる古代異教の物語の受容」『西洋中世研究』第8号、西洋中世学会、2016年、194-208頁。

<sup>18</sup> *« sans ajouter Sans muer et sans rien oster »*, *Ibid.*, vv. 225-226.

<sup>19</sup> *« Puis i metrai la verité »*, *Ibid.*, v. 228.

<sup>20</sup> Armand Strubel, *« Grant senefiance a » : allégorie et littérature au Moyen Age*, Champion, 2002 ; Possamai-Pérez, *op. cit.*, pp. 396-493.

き離されたのであった。そしてふたりとも死んだとき、その親たちは彼らが死んだのを知って、ふたりをひとつの墓に入れた。そして桑の実とはいうと、もとは白かったが、枝に実ったまま黒くなった。この苦しみを表すために、血の色を受け取ったわけである。さて、白かった桑の実が枝先で黒くなる変化についてあなた方にご説明しよう。桑の実が未熟の時、それは白いのであり、熟れると、黒くなるのである<sup>21</sup>。(vv. 1158-1175)

以上の「字義的意味」の内、前半は、冒頭で「真の歴史と一致する」とあるように、この物語を過去に起きた事実であると理解する「歴史の意味」が述べられ、そして後半の2文で、桑の実の色の奇跡を植物学的な知識から説明する「自然科学的意味」が述べられる。

次に、文字の裏に隠された「寓意的意味」が始まり、解釈部分の末尾まで続く。

この物語が意味する寓意をあなた方にお話ししよう。卑劣と墮落と不正、悪徳と混乱にまみれたこの世に神は受肉を、人間への愛のために望まれた。こうして神性はこの世に下り、人間のあいだにとどまることになった。そして人間を末永く救うために、神性はあまねく広がった。そして人間性を持ちながらにして、聖なる栄光の木に吊るされた。その木は、神聖にして貴重である彼の血の色で染められた。その後、真の神と真の人間がしっかりと一緒になって、ひとつの墓の中で生きた<sup>22</sup>。(vv. 1176-1192)

すなわち、この物語の背後に隠されている意味とは、神が人間を愛するがゆえに受肉し、イエスという人間性をもって降誕した後に磔刑に処され、そして神とイエスは墓の中で再び一体となる（そして復活する）、というキリスト教の教えであると説かれている。言い換えれば、恋人「ふたり」は神の

---

<sup>21</sup> « Ensi, com la fable recorde, Qui a voire istoire s'acorde, S'entr'amerent les deus amans, Si fu teulz lor departemens, Que l'uns se mist pour l'autre a mort Et quany il furent andui mort Li parens qui mort les trouverent En un seul tombel les poserent, Et la more, qui lors ert blanche, Si reçut sanguine colour En signe de cele doulour. Or vous veuil l'exposicion Dire de la mutacion De la more, qui estoit blanche, Et puis merci dessus la branche : Quant la more est vers, si blanchioie, Et quant meürist, si nercoieie. », De Boer, *Ovide moralisé, op. cit.*, p. 37.

<sup>22</sup> « Or vous dirai l'alegorie Que ceste fable signifie. En cest monde plain de vilté, Plain d'ordure et d'inquité, De vice et de confusion, Vault Diex prendre incarnation Pour l'amour de l'humanité, Si s'abessa la deïté Tant qu'avec lui prist herbage, Et pour sauver l'umain lignage Fu la deïté estendue Et o l'humanité pendue En l'arbre saint et glorieus, Qui de son saint sanc precieus Fu tains de sanguine tainture, Puis vit en une sepulture, Voirs Diex et voirs homs tout ensamble. », De Boer, *loc. cit.*

「神性」と受肉による「人間性」を、そして「桑の木」はイエスが磔にされた木を意味し、そして、現世では離ればなれにいた恋人ふたりは死後に同じ墓に埋葬されてひとつになるという件が、それまで別々の位格にあった神とイエスが復活によって一体となる、ということを示す。この解釈は寓意的意味の中でも、過去の出来事の中にキリスト教の信じるべき教義が既に象徴的に示されていると考える、第2の「予型論的意味」にあたる。

次いで、第3の「比喩的意味」が説かれる。

[この物語は] それによって、悪と贖罪の苦業とを耐え忍び、私たちの肉欲を滅するために、私たちが何をなすべきか、その規範を見事に私たちに教えたと思われる。私たちの愛と辛苦の死のために彼は自ら磔刑されるがままにした。良きお方、彼は彼の慈悲によって自ら苦しんだのだ。だから私たちは彼に対する友愛のために、艱難に、贖罪に苦しみ、そして良き忍耐においていくらかの苦難を受けなければならない。彼のためにどのような苦難を耐え忍ぶのであろうとも彼に対する愛のために、私たちがあらゆる苦しみに努めて耐えようとすることは正しい。同様に、聖なる殉教者たちもかつてそうすることを習わしとしていて、彼らはこの世を軽視し、神のために自らすべてを殉教に捧げていたのだ。ある者たちは閉じ込められ、鉄の牢屋に繋がられた。他の者たちは石打ちで殺され、また、ある者たちは打たれ、謗られ、人前で侮辱され、ある者たちは試され、ある者たちは死んだ。こうして彼らは喜びのうちに命を絶ち、殉教の苦しみを味わい、愛情の証を神に届けた。多くの迫害において彼らは試練にかけられ、その結果、堅い信仰において見いだされたのだ。かつて聖人たちは、このようにして、天国にたどり着いたものであった。しかし今や、イエスとその御名のために、死や殉教を耐え忍ぶにつけても、何をなすべきか知る人はいない。誰一人、肉体の快樂とこの世の楽しみ以外のものを求めていない。無垢な者はどこにいるのか？ 神への愛のために、そして神の愛に応えるために、死の苦しみに喘ぎ、自らの体を殉教に捧げようとする人々はどこにもいないのか？<sup>23</sup> (vv. 1139-1235)

---

<sup>23</sup> « Bien nous monstra, si con moi samble, Exemple que nous devons faire Pour lui penitance et mal traire Et nostre char mortifier. Il se lessa crucefier Pour nostre amour et mort souffrir. Il mëismes a mort souffrir, Li bon sires, par sa pitié, Si devons pour soie amistié Souffrir mesaise et penitence Et prendre en bone pascience Quel que grief que por lui souffrons. Il est drois que nous nous offrons Pour soie amour a tout grief traire. Ausi soloient jadis faire Li saint martir, qui despioient Le monde et pour Dieu se livroient A tous martires endurer. Les uns fesoit l'un enmurer, Tenir en chartre en fers liez, Li autre estoient lapidiez, Les uns batus et laidengiez, Despis au monde et blastengiez, Li un tempé, li autre mort, Si prenoient en gré la mort Et les martires qu'il soffroient, Et tesmoignage a Dieu portioient D'amour et de dilection. En mainte persecucion Furent li martir esprové Et en la foi ferme trouvé Ensi soloient paradis Li saint home aquerre jadis, Mes or n'a plus nulz homs que faire De mort ne



ここから語り手は聴衆または読者を含む「私たち」を主語に据えて、その「私たちが何をすべきか、その規範を」示す「比喩的意味」を教える。先の予型論的意味において、ふたりの恋人の愛慕ゆえの自殺を、イエスの人間に対する愛ゆえの死と捉えたうえで、ここでは、私たちがイエスに対する愛のために苦難に耐えなければならぬと発展させている。さらに引用文 8 行目以降で、「かつて」と同時代的な「今」を対比することによって、苦難に耐えてきた過去の殉教者たちをキリスト教徒の模範として賞賛すると同時に、その模範からかけ離れた「現状」を批判し、聴衆に訴えかけている。殉教者たちに加えられた数々の迫害の列挙は、ピラムスとティスベが成し遂げた真の愛と自死の苦しみとに呼応して、信徒が目指すべき理想像を聴衆に対して歴々と印象付けただろう。

最後に、第 4 の「アナゴジックな意味」が述べられる。

神の子が再来し、皆それぞれの実績に応じて審判が正当に下される時、どのような苦しみにあうと思っているのだろうか。どうやって自分たちの言い訳ができるのだろうか。これまでの生を享楽に費やしてきた者たちはどのように言い訳ができるのだろうか。さらに彼らは、ほんとうに知っているのだろうか。彼らを贖い、彼らを死と悪魔の手から解き放つために、神が自ら死に赴くのだということ。死と悪魔の手、それが恐るべき獅子のことである。仕留めた獲物のほらわたを喰った残忍で猛り狂った獣のことだ。度を越したすべての人間の魂を獅子は貪り喰った。それが獅子のこと、何か呑み込むものを見つけようと何時も虎視眈々と狙うことに決して飽き足りはしない。その獅子こそは、すべての魂を呑み込み、美しき無垢な若者たちの、すなわち創造主への恋人の、命とペールを踏みじり、落とし込む。それゆえ神の子は、遠回りすることなく、その若者たちを獅子から救うために、死と受難に苦しむことを望まれた。その獅子は神の子がそこに来た時、この世の場から去るにふさわしい。その獅子こそ、悪の中の悪。そんな獅子から、我らの主が私たちをどうかお守りくださるように！<sup>24</sup> (vv. 1236-1267)

---

de martire traire Pour Jhesucrist ne pour son non. Nulz ne quiert mais se l'aise non Dou cors et les delis dou monde. Ou sont li net, ou sont li monde Qui pour la Dieu dilection Et pour recompensation De s'amour vuelent mort souffrir Ne lor cors a martire offrir ? », De Boer, *op. cit.*, pp. 37-38.

<sup>24</sup> « Mes quant li filz Dieu revendra, Juges qui leaument rendra A chascun selonc sa merite, Comment se porront escuser Cil qui lor temps vuelent user En vivre delitablement, Et se vent veritablement Que Diex se veult a mort livrer Pour eulz raiembre et delivrer De mort et des mains au deable ? C'est le lyon espoentable, La crueuse beste enragie Qui avoit l'entraille mengie Des bestes qu'il oy acorees. Il ot les ames devorees de Tous les homes trespassez. C'est li lyons, qui ja lassez Ne serad'espier toute hore S'il trouvera riens qu'il devore. C'est

今度は冒頭で「審判が正当に下される時」とあるように、先述の比喩的意味を、来たるべきこの世の終末に関する「アナゴジックな意味」へ更に発展させる。キリスト教的模範から離れた人々は、最終的に獅子、すなわち悪魔の手に引き渡されることになるのだと説く。「その獅子こそ」« C'est li Lyons » などといった、獅子を強調する語句を冒頭に置く行がこの 20 行の内 4 度も繰り返されている点に、説教者あるいは語り手が悪の存在を強調し、聴衆の改悛の情を呼び起こそうと、最後に熱弁を振るう姿が想像されよう。

### 『寓意オウイディウス』の散文化

15 世紀に至ると、『寓意オウイディウス』の散文化に伴い、そこに収録された 12 世紀の『ピラムスとティスベ』も例外なく散文化された。散文『寓意オウイディウス』には、いわゆる「アンジュー版」と「ブリュージュ版」の二種類があり、前者は 1466 年から 67 年の間にアンジュー公ルネの求めに応じて制作され、今日 1 点の写本のみによって伝えられている<sup>25</sup>。他方、後者はその約 10 年後の 1475 年頃、ブルゴーニュ公の影響下にあったブリュージュで制作されたとされ、ウィリアム・キャクストンによる英訳版を含む 4 点の写本によって今日知られている<sup>26</sup>。程なくして、このブリュージュ版散文を元にした、コラル・マンシオンによる 1484 年の印刷本が刊行され、その後内容に多少の変化を伴いながらも 16 世紀後半まで引き継がれる。本論ではこのブリュージュ版散文の方の伝承過程を辿り、『ピラムスとティスベ』散文化の様態を捉えてみたい。

---

*cil qui toute ame soloit Engoler et qui defoloit Et coloit la vie et la guimple De la belle jovente simple, C'est de l'amie au Creatour, Pour quoi li filz Dieu sans trestour Vault souffrir mort et passion Pour la rescourre dou lyon, Qui dou champ dou monde convient Partir quant li fil Dieu i vint. C'est li Lyons, des maulz li pires. De celui nous gart nostre Sires ! », De Boer, *op. cit.*, pp. 38-39.*

<sup>25</sup> *Ovide moralisé en prose, texte du quinzième siècle*, éd. par Cornelis de Boer, Amsterdam, North-Holland Publishing Co., 1954.

<sup>26</sup> フランス国立図書館 fr. 137 (以下、P 写本)、大英図書館 Royal 17. E. IV (以下、L 写本)、ロシア国立図書館 F.V. XIX. 1。キャクストンによる英訳写本は、オクスフォード、モードリンカレッジ ms. 2124。この内、最も古い読みを掲載する P 写本がファン・エムデンによる校訂版の底本に選ばれている。この校訂版はブリュージュ版散文の『ピラムスとティスベ』のみを、16 世紀末のドニ・ド・アルシ版までのヴァリアントと共に掲載する。W. G. Van Emden, « L'Histoire de *Pyrame et Thisbé* dans la mise en prose de l'*Ovide moralisé* : texte du manuscrit Paris, B. N. F. fr. 137, avec variantes et commentaires », in *Romania*, t. 94, n° 373, 1973.

## ブリュージュ版散文の特徴

ブリュージュ版散文の大きな特徴のひとつに、異教神話に対する態度の変化が挙げられる。韻文版が古代神話の物語を「作り話」とみなした上で、その背後にキリスト教的真実を読み取ろうとするのに対し、この散文版は、ユングが指摘するように、オウィディウスの『変身物語』を「世界の始まりからアウグストゥス帝までの歴史を語る」作品として捉えようとする。一部の写本冒頭には「セザール師の手紙」と題された比較的長い序文が新たに挿入されているが、それによればこの序文の作者は、まずキリスト教における一神教という教義の原則を確認し、異教神話に散見される不道德な箇所は切り取って読むことを推奨しながらも、オウィディウスの物語を、過去の事績を雄弁に伝える歴史書であると同時に、人間の理性を重視した一般道徳の教えが得られる書であるとみなし、読者にこの書の積極的な学習を勧めている。つまりキリスト教的な視点を介在させずに、古代の異教神話を含蓄ある歴史物語として読者へ提案しようとした<sup>27</sup>。

実際にこのブリュージュ版散文は、物語の内容については原則として韻文版に依拠しながらも、それを簡略化して伝える傾向にあり、また、それまで物語に付け加えられていた4つの釈義については、「字義的意味」だけを残し、「寓意的意味」を全て削除するか、あるいはその「寓意的意味」を、そこから宗教的要素を取り除いた一般道徳に置き換えている<sup>28</sup>。

## 散文版『ピラムスとティスベ』における省略と切り取り

『ピラムスとティスベ』においても、物語は全体を通してかなり簡略化されている。また寓意的意味もすべて削除されていることから、上述の特徴を備えていると思われるが、ここではより詳しく、どのような箇所が韻文版のみに現れ、散文版では簡約ないし削除されたのかを見てゆきたい。以下に、散文版が切り取った、あるいは簡約した韻文版の該当箇所を例に挙げ、その内容の特徴ごとに分類した。

---

<sup>27</sup> Marc-René Jung, « Ovide Metamorphose en prose (Bruges, vers 1475) », in *A l'heure encore de mon écrire, Aspects de la littérature de Bourgogne sous Philippe le Bon et Charles le Téméraire*, Les Lettres romanes, 1997, pp. 99-115 ; 村山、前掲論文、203-206頁。

<sup>28</sup> 14世紀末以降、韻文『寓意オウィディウス』に、既に寓意的意味を削ぎ落した写本（リヨン県立図書館 742、フランス国立図書館 fr. 870、fr. 19121）が一部現れていた。しかしながらブリュージュ版散文はこれらをモデルとはしていない。Jung, *op. cit.*, p. 105.

(1) 比喩を用いた増幅表現の切り取り

ex. 「宝石がガラスに、金が銀に […] 勝るように<sup>29)</sup>」(vv. 291-292)

(2) 会話部分を直接話法から間接話法に置き換え、簡約

ex. ティスベの母親と召使の会話 (vv. 314-330)

(3) 強調あるいは反復表現を伴う詳細な状況および心情説明を簡約、あるいは切り取り

ex. 簡約…禁じられるがゆえに増し、また成長と共になお大きくなる恋人たちの慕情と苦悶 (vv. 344-374) ; 駆け落ち前夜の高まる期待 (vv. 826-831) ; 出発前夜の躊躇 (vv. 842-853, vv. 862-867)

切り取り…ティスベの最期「体の両側から血が噴き出て<sup>30)</sup>」(v. 1142) ; 「[ピラムスの] 目、口、顔に接吻して<sup>31)</sup>」(vv. 1145-1146)

(4) モノログ部分を切り取り

ex. 逢瀬を禁じられたピラムスの嘆き (vv. 375-433) ; ティスベの自問と嘆き (vv. 451-536) ; 恋人の死を目の当たりにしたティスベの嘆き(vv. 1067-1102) ; ティスベの死の決意 (vv. 1107-1116)

(5) 神々の介入を示す記述を切り取り

ex. 「ああ、愛の神よ、お前の企みには若き者も老いた者も誰もかなわない […]」<sup>32)</sup> (vv. 251-274) ; ティスベがピラムスと話す方法を神々に問う (vv. 509-12) ; 「その裂け目を […] 愛の神が彼女に見つけさせた<sup>33)</sup>」(vv. 551-555) ; 「愛の神は彼女を多くの仕方で悩ませる<sup>34)</sup>」(vv. 602-603) ; 月明りのおかげで、ピラムスが桑の陰に恋人のベールを発見したことについて、「幸運の神がそうしたのだが<sup>35)</sup>」(v. 915)

---

<sup>29)</sup> « Tant con geme sormonte voirre, or argent [...] », De Boer, *Ovide moralisé, op. cit.*, p. 19.

<sup>30)</sup> « D'ambedeus pars saut li sans fors », *Ibid*, p. 36.

<sup>31)</sup> « Les iex li baise et bouche et face », *loc. cit.*

<sup>32)</sup> « Hai, Amours, devant tes iex, Ne puet durer joenes ne viex [...] », *Ibid*, pp. 18-19.

<sup>33)</sup> « La crevace [...] qu'Amours la fist trouver », *Ibid*, p. 24.

<sup>34)</sup> « En tantes guises la destraint Amours », *Ibid*, p.25.

<sup>35)</sup> « Si con apareilleoit fortune. », *Ibid*, p. 35. fortune の頭文字は校訂版では小文字のままだが、ここは大文字で書かれるべき。

(6) 語り手による嘆きを切り取り

ex. 「ああ神よ、なんとという大きな不運か！ […]」<sup>36</sup> (vv. 912-913)；「ああ！なんと悪いことに！ 彼女がまさにこの時に来ていないなんて！」<sup>37</sup> (vv. 926-927)；「神よ、なんとという愛がここに終わったのか！」<sup>38</sup> (v.1137)

(7) 直接法単純未来形を用いて結末を先取りする表現を切り取り

ex. 「しかし今、彼らの愛が終わるその時が間近に迫っている！」<sup>39</sup> (vv. 1029-1030)；「けれども〔彼女は〕これから苦しむことになるのだ！」<sup>40</sup> (v.1034)

以上をまとめると、まず、(1)～(4)に見られるように、全体の長さを短縮しようとする意図が明らかである。ティスベの嘆きを記す際、散文版作者は「あまりに苦しみが大きく、ひどく嘆き悲しむので、その半分も語ることができないだろう<sup>41</sup>」と述べて、大幅に省略すること先に断っている。

実際に削られたモノローク部分は元の韻文の約4割にのぼる。12世紀の作者が増幅した箇所を削ぎ落とすような、こうした全体の簡約化は、原典である『変身物語』に語られる「ピュラモスとティスベ」にその内容を近づけようとする発想から来ている可能性も考えられる。しかし散文版の作者に原点への忠実な回帰という目的はなかったであろう。なぜなら12世紀の物語のみが語るピラムスの最期の言葉「ティスベ、恋人よ、誰があなたを生き返らせたのか<sup>42</sup>」を載せているからである。

(5)の古代神話の神々による人間への介入を削除する意図は、上述の序文「セザール師の手紙」で主張されていた一神教という教義に即した措置と理解できる。また(6)と(7)は、挿入句に現れる語り手という存在の消除を

<sup>36</sup> « Hé, Diex, con grant mesaventure ! », *Ibid*, p. 31.

<sup>37</sup> « Hé, las ! Con malement demore ! Que n'est venue en icele ore ! », *Ibid*, p. 32.

<sup>38</sup> « Diex, quel amour est ci finee ! », *Ibid*, p. 36.

<sup>39</sup> « Or apprece le terme brief Que lor amours traïront a chief ! », *Ibid*, p. 34.

<sup>40</sup> « Mais orendroit avra dolour ! », *loc.cit*.

<sup>41</sup> « sy grant dueil et tant pitieusement se complaindoit que la moitie n'en poreoit estre racontee. » (P 写本、f° 44r.) 注 26 に示したファン・エムデンによる校訂版は本文中に括弧でくくった異文を挿入させる複雑な表記法を採用しているため、本稿では引用表記の都合上、また注 47 で L 写本の比較的長い異文を指摘する都合上、ブリュージュ版散文から本文を引用する際には、筆者が作成した写本ごとのトランスクリプションを掲載する。

<sup>42</sup> « Tysbee, amye, qui vous a en vye remis » (P 写本、f° 46v.) 韻文版では、「Tisbé, ami, Por Dieu, qui vos remist en vie ? », De Boer, *Piramus et Tisbé, op. cit.*, p. 29, vv. 900-901.

示している。これは歴史的真相を述べるのに適した文体と見なされていた散文による作品に多く見られる特徴のひとつであり、それにより作者はアノニマス化し、語る主体は語り手から物語そのものへと変化する<sup>43</sup>。物語の受容側についても、朗読された物語を聞く聴衆ではなく、書かれた文字を読む読者の存在が想定されている<sup>44</sup>。

### ピラムスの自殺

このようにして、散文版の作者は物語を省略や切り取りによって短縮したが、実は上記の仕方とは異なる、内容の書き換えをある一節において行っている。その一節は、待ち合わせの場所に後からやってきたピラムスが、そこに血の付いたパールを発見して、恋人の死を誤信し、その場で自ら命を絶とうとする場面にある。以下に韻文版と散文版で比較してみよう。

ピラムスはティスベの最期に共にいれなかったことを嘆き、自分だけがまだ生き永らえていることを悔やむと、次のように語る。

韻文版：

私の妹、恋人よ、私があなただを死なせてしまったんだ。私は約束の時間から来て、あなたは先に来ていたのだから。どうか私の右手が怯みませんように。この仕方で私はあなたに償おう。償う？ でもその前に、神々にお願いたい。どうかこの桑に死と苦難、そして悲しみの印をお示くださるように。その実を苦しみに相応しい色に染めてくださいますように<sup>45</sup>。

---

<sup>43</sup> ただし、ここで記される散文体は8音綴の名残をいたる所に、——部分的に途切れてはいるが——留めている。例として冒頭の一節を挙げておく。「En la cite de Babilonnie / eut jadis deux riches hommes / poissans de haultesse et de / lignaige [...] ; Le filz eut nom Pyramus et / la fille fut nommee Tisbee. / Ces deux enfans s'entrainerent / des qu'ilz n'avoient que sept ans d'eage [...]」(P 写本、f° 43v.)

<sup>44</sup> Emmanuèle Baumgartner, « La prose et le roman », in *Perspectives médiévales*, n° 3, 1977, p. 54.

<sup>45</sup> « Suer chiere, Je vous ai morte qui derriere Ving a mon terme et vous premiere. Or pri ma destre que bien fiere. Vengerai vos en tel maniere. Vengier ? Mes primes vueil les Diex prier Qu'il demonstrent en cest morier Signe de mort et destorbier, De plour : Facent le fruit de tel coulour Qui apartiengne a la doulour. », De Boer, *Ovide moralisé, op. cit.*, p. 33, vv. 995-1006.

散文版：

恋人よ、あなたは私への愛のために死んだのだから、私もあなたのために死ぬのが当然だ。だって、あなた無しでは生きてゆくことができないし、生きてゆきたいとも思わない。ああ、桑よ、桑よ、お前の下でその約束の時が決められた。そしてこの世を生きた比類なき彼女の死をお前は認めた。まさに悲しみと死の苦しみの樹と呼ばれるべきだ。私は天の神に願おう。お前の下でこれから起こる大きな苦しみゆえに。なぜなら私を生かしてくれた彼女は死んでしまったのだ。だから私はここで命を絶とう。だからどうか奇跡を起こされんことを。その記憶がずっと永遠に続くような<sup>46</sup>。

この嘆きと祈りの後、ピラムスは剣を抜き、彼女のスカーフに接吻しながらその剣を自らの脇腹に突き刺す。嘔き出した血が白かった桑の実を黒く染める<sup>47</sup>。

韻文版では、ティスベが死んだのは、ピラムスが約束の時間に後から来たせいである。ピラムスは自分の罪をはっきりと意識し、それゆえ自らの命を、剣を握ったその震える右手で絶とうとする。二つ目の詩節の冒頭に置かれた「償う？」*« Vengier ? »*という二音節の一語は、ピラムスの罪悪感を強調するのに効果的に響くだろう。

---

<sup>46</sup> *« Amye puis que vous estes morte pour mon amour bien est raison que je pour vous muyre, car sans vous ne puis ne ne vueil vivre. Hee mourier mourier dessoubz toy fut l'heure assignee, et tu as consenti la mort de celle qui vivoit ou monde sans pareille. Bien doit estre nomeez arbre de tristesse et de mortele douleur. Je prie au souverain Dieu que pour la grand douleur que soubz toy sera avenue. Car puis que celle qui me faisoit vivre est morte, je y deffineray qu'il y vueille demonstrer tel miracle dont memoire puisse estre a tousiours perpetuellement. »* (P 写本、<sup>o</sup>46r.)

<sup>47</sup> 桑の実の奇跡をめぐる、作品伝承の中で微妙な食い違いが見られる。オウィディウスの『変身物語』では、桑の実の変化を神々に願ったのは、自殺直前のティスベであるが、12世紀の『ピラムスとティスベ』ではピラムスになっている。ブリュージュ版散文 (P 写本) も12世紀版と同様に、願う主体はピラムスである。しかし同じブリュージュ版散文のL 写本は、当該箇所について、P 写本と従属節の位置と時制が異なっており、この点に注意すると、P 写本では、「これから起こる」(本文中引用部 5-6 行目)「ピラムスの自殺」が桑の実の奇跡を惹き起こす様に書かれているのに対し、L 写本では、その奇跡は既に「起こった」ティスベの死に起因するものとして乞われている。

*« Je pry e au souverain Dieu que pour la grand douleur que soubz toy est advenue, qu'il y voelle demonstrer tel miracle, dont memoire en puist estre a tousiours et perpetuellement, puis que celle qui me faisoit vivre y est morte [...] »* (L 写本、<sup>o</sup> 46v.)

「私〔ピラムス〕は天の神にお願ひしよう。お前〔桑の木〕の下で起こった苦しみゆえに、神がここに奇蹟を、その記憶がいつまでもあり続けるような奇蹟を示されることを。私を生かしてきたその彼女がここに死んだのだから。」

他方、散文版では、ティスベが死んだのは、彼女がピラムスを愛していたからである。彼女はピラムスを愛していたからこそ、約束の場所に来たのであり、そこで不運にも獅子に殺された（という誤信が起きた）のである。ピラムスは彼女の愛に応えようとして、また同時に彼女という生き甲斐を失った絶望感から自死を決意する。ピラムスの「私はここで命を絶とう」«*je y deffineray*»という言葉には、もはや死への恐れや迷いは無く、真の愛に突き動かされた清々しいまでの堅い決意を感じさせはしないだろうか。

散文版で、自殺の動機が「自責の念」から「真の愛」へと置き換えられたのは、物語を短縮しようとしたり、神々を介入させずに物語を歴史化しようとする意図からのみでは説明がつかない。そこで注目したいのは、この変更によって物語自体が、韻文版で説かれていたキリスト教的な寓意的意味を強めるような内容に変化していることである。

韻文版での寓意的意味の解説を再度思い返してみよう。この物語から読み解くべきことは、神が人間への愛のために受肉し、人の子として受難し、磔刑の末に死に、そして復活の時にまたその神性において一体となる、というキリスト教の教義、そして、私たち人間も死の苦しみを恐れず、神に対して愛の証を示すべきだという規範的教えであった。このような読解を導くためには、ピラムスの死の動機は「自責の念」よりも、死をも辞さない「真の愛」のほうが筋が通りやすい。つまり、散文版の作者は、韻文版で説かれていたキリスト教的な寓意的意味の解説部分を自らの版で削除しながらも、それこそがこの物語から汲み取るべき本質の意味であるという前提の意識から、物語自体を、キリスト教的解釈とより一致するような内容に書き換えたのではないだろうか。この書き換えがどれ程意図的であったかどうかは、『寓意オウィディウス』に含まれる他の物語についても調べる必要があるが、いずれにしても、この散文版『ピラムスとティスベ』には韻文版にあった寓意的意味の解説部分が残されていないにもかかわらず、物語の内容自体がキリスト教的理解へと導く性格を持っていると言える。

この散文テキストを受け継いだコラル・マンシオンは寓意的解釈部分の欠落を、韻文版『寓意オウィディウス』および神学者ペトルス・ベルコリウスによる『寓意解釈集成』*Reductorium morale*の第15巻「寓意オウィディウス」*Ovidius moralizatus*を用いて埋め、1484年に刊行した。この印刷本は1493年にアントワーン・ヴェラルの編集により『詩人の聖典』*La Bible des poetes*として再版され、さらに1531年にジャン・プティとフィリップ・ル・ノワールに版元を変えて再々版される。このテキストを一部継承する最後の著作は



1532年にリヨンで出されたドニ・ド・アルシによる刊行本で、そこで寓意的意味の解説部分は再び削除される。この著作は、その2年後にクレマン・マロが『変身物語』のラテン語原典に依拠したフランス語翻訳を刊行した後も、1586年まで計12版が刊行された<sup>48</sup>。上述の、ブリュージュ版散文で書き換えられたピラムスの死の動機の箇所は16世紀の最終版までのこれら全ての版で踏襲されている<sup>49</sup>。

15世紀後半から16世紀に至ると、ラファエル・レギウスやヤコブ・ミキルスといった人文主義者たちは古典本来の読み方を提案し、そこにキリスト教教義に囚われない、人間と自然を中心に捉えた一般道徳を模索し始めた<sup>50</sup>。『寓意オウィディウス』のブリュージュ版散文は、キリスト教的な寓意解釈を取り除いた点で、そのような人文主義的特徴を彼らに先んじて備えていたとみなすことができる。しかしながら、少なくとも『ピラムスとティスベ』に関してはこの散文化によって、宗教的混淆のいっそう深化した物語に変化したと言える。

---

<sup>48</sup> Ann Moss, *Ovid in Renaissance France, A survey of the Latin editions of Ovid and commentaries printed in France before 1600*, London, The Warburg Institute : University of London, 1982, p. 38.

<sup>49</sup> Van Emden, *op. cit.*, p. 44.

<sup>50</sup> Don Cameron Allen, *Mysteriously Meant, The Rediscovery of Pagan Symbolism and Allegorical Interpretation in the Renaissance*, The Johns Hopkins Press, Baltimore and London, 1970, pp. 173-195 ; Moss, *op. cit.*, pp. 28-31.